

# 「認識論の意義と課題」とは何だったのか —エドゥアルト・ツェラーの場合—

渡 邊 浩 一

## 要 旨

エドゥアルト・ツェラーによる1862年の講演「認識論の意義と課題について」は、「認識論」という哲学的ディシプリンの普及・定着に大きな寄与をもたらしたのものとして、かつてしばしば言及された標準的業績である。当の語そのものに関しては、知られるところでは、1819年のテンネマン『哲学史』（第11巻）の用例が初出であり、また形而上学および論理学という他のディシプリンとの区別についても、エルンスト・ラインホルトによって遅くとも1827年には明示されている。これに対してツェラーの寄与は、先立つ大著『ギリシア人の哲学』で得られた広範な哲学史的展望のもと、認識論を近代哲学の中心問題として位置づけ、今後そこにおいて探求されるべき課題を指し示した点にある。そうした経緯を確認しておくことは、このディシプリンの現状と今後について考えるうえでも無意味ではないだろう。

キーワード：認識論、エドゥアルト・ツェラー、新カント派

## 1. はじめに

「認識論」のあり方が問われるとき、このディシプリンの形成・定着にあたって重要な役割を担ったものとして、かつて決まって言及された仕事がある。1862年10月22日、当時48歳のエドゥアルト・ツェラー (Eduard Zeller, 1814–1908) が新たな任地ハイデルベルクで行った「認識論の意義と課題について (Ueber Bedeutung und Aufgabe der Erkenntniss-Theorie)」という講演がそれである<sup>1)</sup>。それからおよそ150年を経て、元来《統一》を指向して出発した認識論はその自己イメージに関して著しい《分裂》の様相を示すに至っており、そうしたなかツェ

1) ツェラーの生年については諸書の記述に多少の揺れがあるが、本論ではH・ディールスによる追悼講演 (Diels 1911) の記載にしたがう。また講演「認識論の意義と課題について」からの引用は、講演の後——10月26日付で書かれた「まえがき」を付して——ハイデルベルクのKarl Groos書店から公刊された原著を参照しつつ、頁づけについてはツェラーの『講演と論文 (Vorträge und Abhandlungen)』に所収のものに拠った (第二集 1877年、479–496頁)。なお、講演のタイトルに現われる「認識論」の語は原著ではErkenntniss-Theorieと表記され、『講演と論文』ではErkenntnisstheorieとなっている。かつてファイヒンガーは、このハイフネーションのあり方から1862年当時のErkenntnisstheorieという複合語の真新しさを読み取ろうとしたが (Vaihinger 1876 [拙訳 2013 : 59–60])、その後の調査研究の進展によってこの想定は支持されえないものとなっている。

ラーの講演もすっかり忘れられた観があるが<sup>2)</sup>、本論は、歴史と現状に即して改めて「認識論の意義と課題」の把握へと立ち至るために、ひとまず原点に立ち返ってそれがそもそも「何であったか」を思い出すことを課題とする。

ところで困ったことに、思い出そうにもツェラーの仕事はほとんど知られていない。大著『ギリシア人の哲学 (Philosophie der Griechen)』によって哲学研究史上に名前だけは登録されているが、その古代哲学史家がなぜ件の講演で「認識論」の唱道者としてふるまっているのか——またそれがなぜ「新カント派」という哲学運動の端緒 (のひとつ) とされるのか——は、われわれにとってひとつの謎である<sup>3)</sup>。そこで以下では、認識論というディシプリンが台頭してきた経緯を明らかにするためにも、ツェラーがどのようにして「認識論の意義と課題について」という講演を行うに至ったのかを彼自身および同時代のテキストに即して再構成することに努めたい。

しかしそのためにも、まず「認識論」という語の導入事情を確認しておくことが必要だろう。

## 2. 「認識論」という語の起源について——テンネマンとE・ラインホルト

「認識論」いう訳語は、Erkenntnistheorie、Erkenntnislehre、epistemology、theory of knowledge 等、複数の欧語に対して用いられるが、これらの語が共通に指し示す哲学的ディシプリンの確立にあたってとくに重きをなしたのはErkenntnistheorieという複合語である<sup>4)</sup>。今日知られるところでは、テンネマン (Wilhelm Gottlieb Tennemann, 1761–1819) の『哲学史 (Geschichte der Philosophie)』第11巻 (1819年) の用例がその初出とみられる<sup>5)</sup>。

『哲学史』(1798–1819年)は11巻(12冊)からなる未完の大著で、ロックとライプニッツを中心とする第11巻は、先立つ第10巻(1817年)とあわせて第7部(「認識の起源と方法に深く入り込み体系的統一に向けて努力する精神でもってドグマ的および懐疑的に哲学する新しい自立的試み」)を構成している。そこで「認識論 (Erkenntnistheorie)」の語は、ロックの『人間性論』の内容概観の後、その評価と関わって次のような仕方で導入されている。

- 
- 2) このことはおそらく、近代認識論史に関する最古の論文であるVaihinger (1876 [拙訳 2013])、長く各種の哲学事典の種本となっていたEisler (<sup>4</sup>1927)、戦前の日本の認識論研究の水準を示す高橋 (1932) 等の命脈と関連している。英米圏で比較的最近ツェラーの論文に言及しているものとしてはRorty (1979) が挙げられる。日本で近年この分野のスタンダードな教科書となっているとみられる戸田山 (2002) には、もはやツェラーの影も形も認められない。
  - 3) 「哲学史学」「新カント派」等々を扱った論著のなかである程度まとまって言及されることはあっても、ツェラーの仕事の全体像に迫ろうとしたものはHartung (2010a) 以前には見られない (——その意味で貴重な編著であるが、編者の担当箇所Hartung (2010b)；—— (2010c) は残念ながら文献の扱いに十分な慎重さを欠いている)。哲学史家としてのツェラーについては宮本 (1948)、新カント派としてのツェラーについてはKöhnke (1993)、また神学者としてのツェラーについてはSchaede (2010) から教えられたところが多かった。——最近、ツェラーについてのまとまった研究を含むBeiser (2015) が出版されたが、本論執筆時点ではこれを参照することはできなかった。
  - 4) 今日の正書法ではErkenntnisであるが、本論では引用原典に拠ってErkenntniss, Erkenntniß等の表記を残す。
  - 5) Erkenntnistheorieおよびそれに関連する語の概念史についてはVaihinger (1876 [拙訳 2013])、Köhnke (1981)；—— (1993) が基本文献であり、本論もこれらに多くを負う。

にもかかわらず、この学に向けた限界規定と根拠づけ (Grenzbestimmung und Grundlegung zur Wissenschaft) の試みは、それ自体としてみれば、まだきわめて不完全で欠陥のあるものであった。というのも、その研究はただ外感および内感によって与えられる限りでの認識——それに関して人間精神は単に受動的に感覚において関わる——の質料的諸制約にのみ向かっていたからである。ここから認識の内容と起源についてのあまりに一面的な見解が生じたのは、人間精神の自己活動性にも表象の素材が含まれうるということが、少なくとも可能性として認められねばならなかったためであり、また、一面的な認識論 (eine einseitige Erkenntnistheorie) が生じたのは、まさしくただ感受性のみに注意が向けられ、それゆえ知性には単に論理的な比較、抽象および結合という能力が与えられたにすぎなかったからである<sup>6)</sup>。

《認識論はロックに始まる》というのはこのディシプリンに関して広く久しく保持されてきた共通認識であるが<sup>7)</sup>、この結びつきはそもそもの語の導入からしてそうであった。ただし「一面的 (einseitig)」という形容からもうかがわれるように、ここではまだ「認識論 (Erkenntnistheorie)」の語にディシプリンとして独立しうるような積極的意義は与えられていない。『人間知性論』の翻訳者でもあるこのカント派の哲学史家の見るところでは、「人間の認識の限界と制限」に注意を向けたロックの哲学は<sup>8)</sup>、「ドグマティズムの転回点であり、より良い方法の端緒をなす」とはいえ<sup>9)</sup>、「より深く認識能力と経験の諸条件を考究することなく、ただ経験表象の分析によるのみ」である点など、経験主義的な一面性を免れていないからである<sup>10)</sup>。

それゆえ、ロック以降の哲学の展開が「認識論」の語によって語られることは、仮に著者の急逝によって途絶した『哲学史』の続刊が刊行されていたとしても、未だありえないことだった。同じ著者の『哲学史綱要 (Grundriss der Geschichte der Philosophie)』第二版 (1816年) 緒論の次のような記述を見ても、そのことは明らかである。

- 
- 6) Tennemann 1819 : 71–72. Erkenntnistheorieの語の起源について、Vaihinger (1876 [拙訳 2013]) は1832年のエルンスト・ラインホルトの著作を初出としていたが、そこからさらに遡って——関連する諸語の探索も含めて——テンネマンにおける用例を示したのはKöhnke (1981 : 199–201) の功績である。Köhnke (1993 : 61–64) ではさらに、その用例が「新カント派」の形成という大きな文脈のもとで位置づけ直されている。ただし叙述は知識社会学的な関心に基づいてなされており、テンネマンの哲学史観に照らして「認識論」の語の導入状況を検討するまでには至っていない。
- 7) Vaihinger (1876 [拙訳 2013 : 55]) という認識論史の端緒をなす文献からしてそれはそうで、高橋 (1932 : 9) をはじめ日本の研究者にも引き継がれている。「—— [……] 近代認識論というのは、やっぱり、デカルトから始まるのか? [✓] —— とういえなくはないが、やはり、彼よりも一世代あとのロック、著作でいえば1690年に出た『人間悟性論』からと言っておくのが妥当な線だと思う」(廣松 1977 : 73)。——これが「認識論」というディシプリンに関してのある時期までの共通理解であった。
- 8) Tennemann 1819 : 65.
- 9) Tennemann 1819 : 17.
- 10) Tennemann 1819 : 65–66. テンネマンの学問的経歴——1787年から1804年にかけてイェナで私講師・員外教授を務め、その後、没年までマルブルクで正教授の職にあった——についてはWundt (1932 : 193–196) を参照。

哲学（das Philosophieren）は、認識能力の完備的で根本的な探求から客観の認識へと進みゆくか、あるいは客観の認識から認識の理論（Theorie der Erkenntnis）へと進みゆくかのいずれかである。前者は批判的に哲学する方法であり、後者はドグマ的に哲学する方法である<sup>11)</sup>。

ここでの「認識の理論（Theorie der Erkenntnis）」という語法からも、「認識論（Erkenntnistheorie）」という成語がテンネマン自身の手になるものであることがうかがわれるが、それとともにやはり注目されるのは、カント的な認識（能力）の「批判」の基準に照らしてロック的なその「理論」を依然ドグマティズムの枠内にとどまるものとする著者の見方である。古来のドグマティズムと懐疑論の対立が近代のカントの「批判」によって調停され、そこにおいて哲学の「発展」はひとつの完成に達する、というのがテンネマンの哲学史観で、これに依拠して「認識論」の語は歴史的に既に克服された（それゆえ各人にとっても克服されるべき）哲学的立場を指示するものとして導入されている<sup>12)</sup>。したがって『綱要』第二版でも、カントおよびカント以降の諸家の立場が「認識の理論」という言葉によって捉えられることはない。

しかし容易に予想されるように、ほどなく「認識論」はより積極的な意味をともなって拡張的に使用されることとなる。——今日に連なるその用法、ひいてはそのディシプリン化の端緒として、エルンスト・ラインホルト（Ernst Reinhold, 1793–1855）の『論理学、または一般的思考形式の学（Die Logik oder die allgemeine Denkformenlehre）』（1827年）序文の次のような用法は、たしかにその点で改めて注目されるべきものである<sup>13)</sup>。

著者〔＝E・ラインホルト〕は、形式論理学に、その固有の学説を形而上学や認識論（Erkenntnistheorie）と混ぜ合わせることで、より広い範囲やより高い意味を与えようと

- 
- 11) Tennemann<sup>2</sup>1816 : 31. 本文に対する註釈としてさらに次のようにいわれている。「批判的方法が哲学するうえで唯一の真なる方法であり、そうした方法は厳密に学的な、つまりドグマ的な仕方をせねばならないのだが、[……] 哲学はそこからは始めることができない。この方法に従う者が掛け値なしの哲学者である。これと反対の方法にしたがって哲学するドグマティカムの体系は認識の理論（Theorie des Erkennens）に基づいて多くの真なるものを含みうるが、それは不完全で、固定的で、一面的で、ドグマ化に向かう意見や主張によって規定されており、それゆえ純粋には受け取られない。そしてそれゆえあくまで真なる認識へと導くものでもない」（Tennemann<sup>2</sup>1816 : 31–32n.）。
- 12) 「認識の理論（Theorie des Erkennens / Theorie der Erkenntnis）」という未だ熟さぬ言い回しは、そのようなものとして、ロック以前の哲学の批判的記述のためにも用いられている（Tennemann<sup>2</sup>1816 : 115 [エピクロス], 224 [オッカム], 282 [デカルト]）。
- 13) 認識論史上のエルンスト・ラインホルトの功績を最初に指摘したのはVaihinger (1876 [拙訳 2013 : 58–59]) で、1832年（–34年）の『人間の認識能力の理論と形而上学』の第一巻について、それが内容的に「まったく欠けるところのない認識論を提供しており」、さらにその緒論が「今日なお通用する実に読み応えがあって見通しのよい認識論の発展史を提示している」とした。そこからさらに遡ってKöhnke (1981 : 202–208) は、1827年の『論理学、または一般的思考形式の学』等でラインホルトが既にそうした視座を獲得していることを示した（cf. Köhnke 1993 : 64–68）。本論本節の議論は、この両者の業績に多くを負う。なお、E・ラインホルトの生涯と学説についてはやはりWundt (1932 : 345–359) が有用である。

する人々には同意しないが、同様にまた、形式論理学がいかなる本来的な拡張もいかなる本質的な改良ももはや必要とも可能ともしないように思われるという他の多くの人々に賛同することもできない。著者の信じるころではむしろ、今の時代に哲学的な真理を求める者が努力するよう要求されているより重要なことのひとつに、これまでなされてきた以上に完璧な仕方、一般的な思考形式の学に現に属する領土を耕し、より先鋭にその概念を限界づけ、そして、それらをその規定の豊かさとその発展の学的 (wissenschaftlich) 形式という点でさらに完成に近づけるといえることがある。これにより多くの、単に論理学に関わるのでない誤謬——それは哲学的問題一般の扱いに不都合な影響を及ぼす——は排除され、哲学的探求の方向と方法における真の進歩がもたらされるのである<sup>14)</sup>。

さまざまな哲学史的連想を誘う一節であるが、いま「認識論」という点で何より重要なのは、それが「形式論理学」と「形而上学」というディシプリンと明確に区別され、独自の意義を持つものとして捉えられている点である。エルンスト・ラインホルトにとって『論理学』は、父カール・レオンハルトの哲学を（その名に相応しくまじめに）受け継いだ彼自身の体系構想の着手点となるものであったが、その緒論で用意周到にアリストテレス以来の論理学史の展望を行っている。それにしたがえば、「ベーコンとデカルトの登場以来、合理論と経験論という二つの相対立する立場から、人間の認識の起源、実在性および範囲についてより深くまた包括的な探求が行われ」、その結果、論理学はアリストテレス以来の「諸学のオルガノン」としてのそれよりも、「われわれがいま認識能力の理論 (eine Theorie des Erkenntnißvermögen) と名づけるであろうものに近づいた」<sup>15)</sup>。そしてロック、ライプニッツ、テーテンスら先行者から進んでカントは『純粹理性批判』においてアприオリな諸概念と諸原則に定位し、しかも「心理学に属する諸研究と認識能力の理論に属する諸研究とをまったく分離して見る」という立場から、「人間の意識の発生的叙述を通じて認識と単なる思考との間の限界画定を行い、意識のうちで本質的にして必然的なものすべてを際立たせ、そして、経験認識一般にその領域を指示したうえで認識の全体構造の計画を描くことを試みた」<sup>16)</sup>。アприオリな形式の位置づけに関するその心理学的残滓にもかかわらず、「認識の理論 (Theorie des Erkennens) を彼の形而上学の学説体系の根底に据え、人間の意識の発生と単純な根本活動性の協働の合法則性を精神の生のうちに探究するという課題を設定したこと」は、「哲学的な真理を探究する者にとって永久のものである」<sup>17)</sup>。

こうして認識論は、形式論理学および形而上学との明確な区別において、しかも、認識のアприオリな形式を経験心理学的にではなく——後の言葉でいえば論理主義的に——探究するも

14) Reinhold 1827 : VII – VIII.

15) Reinhold 1827 : 26 – 27.

16) Reinhold 1827 : 45 – 46.

17) Reinhold 1827 : 51.

のとして位置づけられた。カントの超越論的論理学をプログラム上の出発点に置くその哲学史観も含めて、E・ラインホルトがこのディシプリンの最初の定礎者であることは以上の瞥見の限りでも確からしく思われる。ただし、既にテンネマンからラインホルトに至る最初の「カント派」のもとで「認識論の意義と課題」が把握されていたとすれば、何が後のツェラーら「新カント派」の寄与ということになるのだろうか。

### 3. 哲学史と哲学のあいだで——『ギリシア人の哲学』前後のツェラーの見解

新カント派の諸家のもとでの「認識論」の伸張は、ときに国家としての統一に向かう当時のドイツの社会・政治動向と関連づけて説明される。ツェラーをはじめとする諸家が異口同音にカントへの復帰を説きはじめた1860年代以降、ドイツの大学は著しい拡張期に入るが、たしかにポスト増設にともなう新世代の台頭と「認識論」の定着・展開との間には一定の相関が認められるようである<sup>18)</sup>。とはいえ、1862年の論文に先だつツェラーの諸テキストを仔細に見るならば、ことが知識社会学——ちなみにこれも認識論から派生したディシプリンである——の水準に終始するものでないことも同時にまた明らかである。

「認識論」の語は遅くとも1844年の『ギリシア人の哲学』初版・第一部で既に通常の仕方で行われている<sup>19)</sup>。そこでツェラーは、まずギリシア人のもとでの「哲学的方法」の一般的特徴として、それが「あらゆる独立した認識論 (selbständige Erkenntnisstheorie) がそうあるべきような基礎でなく、むしろ客観的思弁の帰結である」ことを指摘し<sup>20)</sup>、またデモクリトスに関してとくに「彼の認識論 (seine Erkenntnisstheorie)」に着目し、その難点を論じるということをしている<sup>21)</sup>。さらに1852年の同書初版・第三部 (第一分冊) では、ストア派の体系の再構成のために「認識論、形式論理学、および存在論 (die Erkenntnisstheorie, die formale Logik und die Ontologie)」という区分を採用し、それぞれ項目を立てて論じたうえ、エピクロス派および懐疑派との対比に際してもこの概念を多用している<sup>22)</sup>。

ところで注意しなければならないのは、これが——ともするとそう思われるような——新しく創出された概念の素朴な遡行的適用ではなく、哲学史 (歴史) と体系 (哲学) の関係についての独自の見解に基づく意識的な使用であったということである。ギリシア人が使わなかった

18) Köhnke (1993 : 302–319) はこの点の定量的調査を行っており、きわめて示唆的である。同様の調査研究がわが国の戦前・戦後の哲学研究についてもなされるべきだろう。

19) VaihingerもKöhnkeもツェラーの1862年の論文の意義を認めながら、彼のそれ以前の仕事と関連づける作業はしていない。もっとも、Hartung (2010a) までツェラーの仕事が顧みられてこなかったことを考えれば、無理からぬことともいえる。

20) Zeller 1844 : 66.

21) Zeller 1844 : 201.

22) Zeller 1852a : 29, cf. 41, 44, 47, 54, 208, 288, 338–339. さらに、第三部 (第二分冊) の巻末事項索引にも、「Erkenntnis」という項目の下に「Erkenntnisstheorie des Sokrates」という項目が立てられている (Zeller 1852b : 967)。ただし、そこで指示されている第二部の40頁に見られるのは「認識の理論 (eine Theorie des Erkennens)」という表現である (Zeller 1844 : 40)。

概念をその哲学の再構成のために用いるのと、『テアイテトス』や『デ・アニマ』を認識論の書とするのは同じことではない<sup>23)</sup>。新約聖書の実証的批判から学問的キャリアを——パウルを師とし、シュトラウスを兄弟子として——開始した近代最大のギリシア哲学史家は、この点について十分自覚的であった<sup>24)</sup>。

『ギリシア人の哲学』刊行に先立ってツェラーは「直近の過ぎにし50年の古代哲学史」（1843年）という論文を発表しているが、前世紀末からドイツで台頭を見た古代哲学史の発展段階を「カント派」「シェリング派」「ヘーゲル派」に区分し、以下のように位置づけている。すなわち、まずテンネマンの『哲学史』を典型とするカント派——そこにE・ラインホルトも含まれる——は、「歴史的-批判的精神（historische-kritische Geist）」に基づく厳密な史料批判によって哲学史に画期をなしたが<sup>25)</sup>、対象を「外的に研究報告したり、消極的に批判したり」するにとどまり、「積極的にさまざまな体系の精神に入り込み精神の歴史的発展を内側から再構成する」には至らなかった<sup>26)</sup>。この点で功績があったのは「有機的な歴史考察の原理」を導入したシェリング哲学で<sup>27)</sup>、たとえばその派に数えられるシュライアーマッハーは優れた直観的把握を示したが、とはいえ、「歴史の有機組織を全体として満足に叙述する」という点で欠けるころがあった<sup>28)</sup>。しかるに、以上に対してヘーゲル哲学は、「思考する精神が自らの発展において取った歩みの概念的・有機的な再生産」を通じて「主導理念を遂行する」という立場をとり、これによって彼は「哲学史の概念と課題を彼に先立つ誰よりも正しく鋭く規定した」<sup>29)</sup>。

ヘーゲルのこの精神の有機的・概念的「発展」という観点は、ツェラーにしたがえば、「歴史的批判」という点で指摘されるその諸々の困難にもかかわらず、依然として哲学史にとて根本的な意義を有する。ただし、「実行にあたってこの原則を過度に直接的に適用し、そうして諸現象——それは間接的に進歩を含むに過ぎない——を、それ自体そのものとして哲学全体の発展への関係を度外視して、先立つそれ自体として完全な諸現象の上に位置づけたこと」はたしかに彼の誤りで<sup>30)</sup>、そのことは「われわれ門弟」に対して「常により完全に歴史の知と哲学の知との媒介に努めるように」との警告を与えるものであるという<sup>31)</sup>。

『ギリシア人の哲学』の開巻劈頭、ツェラーは「まさにわれわれの時代が課題としているのは、ギリシア哲学史を完結した有機的形態と逆の方向に持ちきたらすこと」であるというが<sup>32)</sup>、

23) そうしたアナクロニズムを指摘するなかでローティは、「ツェラーのような新カント派の哲学史家がしばしばやったように」、というようにツェラーを槍玉にあげている（Rorty 1979 : 222 [邦訳 1993 : 251]）。同時代の多くの認識論者についてはともかく、ツェラーその人に対する評価としてはこれは少々公正を欠くものといわざるをえない。

24) このいわゆる「テュービンゲン学派」の神学者としてのツェラーの仕事についてはSchaede (2010) が参考になる。

25) Zeller 1843 : 5 - 6.

26) Zeller 1843 : 10.

27) Zeller 1843 : 24.

28) Zeller 1843 : 33.

29) Zeller 1843 : 51 - 52.

30) Zeller 1843 : 83 - 84.

31) Zeller 1843 : 63.

32) Zeller 1844 : 2.

はたして、ここではかつてなされたような「歴史の概念的再構成 (eine begriffliche Reconstruction der Geschichte)」はもはや許されない<sup>33)</sup>。というのも、歴史的現象とは個別的・偶然的なものであり、「哲学的構成はまさにそれゆえに決して歴史的現象をその具体的な完備性において導出しえず、ただ歴史的運動の一般的な基本的特徴を導出しうるだけである」から<sup>34)</sup>、逆に「歴史」の側からいえば、「哲学がその一般的概念の点で何であるのか、また何によって精神生活の他のあらゆる領域から区別されるのかということの決着を歴史はつけられず、そうしたことをむしろ哲学そのものに基づく規定のひとつとして前提せざるをえない」からである<sup>35)</sup>。

要するに、「純粋な思考の学」たるべき哲学と「経験」にもとづく実証的諸科学との間には原理的な断絶がある。両者は直接的には架橋されえない。しかしながら、常に間隙を残すにせよ、哲学史の再構成にとって哲学(体系)は不可欠であり、他方また、現在の哲学の課題を浮かび上がらせるためには経験(哲学史)に基づくボトムアップ的な探究を要する。——そしてまさにここにおいて、哲学(純粋な思考)と哲学史(歴史)の媒介をなすべきものとして、それ自体もまた哲学史的な仕方で導入されるのが「認識論」であった。

いま緒論で先取的に語られるところにしたがえば、「ギリシア哲学には主観と客観、精神と自然の間の不和はまだ現われておらず、思考はその対象と、精神は自然といまだ直接的に統一された状態にある」<sup>36)</sup>。しかし「この精神の自然との不和において、ギリシア哲学の生動性も落ち込んでゆく」<sup>37)</sup>。より具体的にいえば、「ソクラテスも知の理念によって内心で鼓舞されたが、認識の理論(Theorie des Erkennens)を立ち上げることはしなかった」し、「プラトンとアリストテレスはそうしたものを与えたが、とはいえそれらも近代的意味でのものではなかった」<sup>38)</sup>。しかしながら、「次の反省哲学においてはじめて思考の存在からの分離が始まり、それらの一致の基準が問い尋ねられたが、この問いはその意義の点では古代の原理を超出しているので、その哲学もここでその答えを得ることはまだな」かった<sup>39)</sup>。

「なんとまったくここでは近代の哲学と異なっていることか！」——古代哲学の発展段階に関する以上のような概観の後、ツェラーはそう嘆息して次のように結論する。「古代哲学の原理はこの両側面の直接的統一であり、それは直接的であるだけに和解されえない対立を両側面においてもつが、近代哲学の原理はその両側面の対立から発展し、媒介され、そして自由であるような統一である」<sup>40)</sup>。つまり、「知の真理性への疑いが彼ら〔古代哲学〕のもとではある自立的発展の始まりであり、〔これに対して〕デカルトからカントおよびその決着点であるヘー

33) Zeller 1844 : 4.

34) Zeller 1844 : 7 - 8.

35) Zeller 1844 : 10.

36) Zeller 1844 : 17.

37) Zeller 1844 : 20.

38) Zeller 1844 : 22.

39) Zeller 1844 : 22.

40) Zeller 1844 : 21.

ゲル——彼によって哲学の主要局面は制圧された——に至る認識説 (Erkenntnislehre)、〔つまり〕結末は、知への疑いや直接的認識の単なる要求でなく、概念的思考とその絶対的真理性の方法的根拠づけである<sup>41)</sup>。

用語こそ未だ不安定であるとはいえ、「認識論」という概念がどのような見通しをもってギリシア哲学の叙述に用いられているかは十分明らかだろう。後世の術語・ディシプリンである「認識論」を古代哲学史の再構成のために遡行的に適用することで、ツェラーは近代の自らの観点との差異において古代哲学の特徴を浮かび上がらせ、そこからひるがえって近代哲学の課題をも浮き彫りにしようとしている。——たしかに、ここにはある種の循環がある。しかし「過去が現在の鏡であるのは〔……〕現在が自らの姿を過去に写し見る (bespiegeln) ためである」という彼自身の言葉からも汲み取られるように<sup>42)</sup>、過去の経験的・歴史的データの再構成のためには現在持ち合わせている概念・体系が不可欠であり、またその概念・体系が再構成を通じてその都度更新されるべきものであるという現代のわれわれの学的知見は、練達の哲学史家であるツェラーにはごく自然に体得されている<sup>43)</sup>。

ひとまずその点を認めてよいとして、むしろ問題は、そうして「認識論」という観点から古代哲学との対比において近代哲学の特徴が「哲学史」として叙述されても、それがそのまま現代の「哲学」たりうるわけではないということである。いったい今現在の「認識論の意義と課題」とは何か。『ギリシア人の哲学』を書き終えたツェラーにとっても<sup>44)</sup>、彼自身哲学者たらんとする限り、それはやはり問われねばならないことだった。

#### 4. 「認識論の意義と課題について」——論理学・認識論・形而上学

こうして1862年10月22日、新たな任地ハイデルベルクでの講義「論理学および認識論 (Logik und Erkenntnistheorie)」の開講に際して、ツェラーは「認識論の意義と課題について」論ずるに至る。同名の講義は前任地のマールブルクでも1860年 (／61年の冬学期) に開講していたが<sup>45)</sup>、かつてヘーゲル——『論理学 (Wissenschaft der Logik)』を完成して間もない

41) Zeller 1844 : 23.

42) Zeller 1843 : 1.

43) 哲学史が「哲学」の歴史である以上、史家は「体系 (System)」を持ちあわせていなければならないとツェラーは主張するが、それは完結した絶対的な体系ではなく、歴史的知見の増大に応じてその都度更新されるべきものと考えられている。その限りでは、これを「理論」や「仮説」と読み替えることが可能であろう。ただし、同時代的にはそのようには受け止められず、Johann Ulrich Wirth (1810-1859) との間で擦れ違い気味の論争が生じた。その応酬については宮本 (1948 : 28-49) に比較的詳細な記述がある (が、これも少々「体系」の側に偏っているように思われる)。ツェラーの「体系」については Hartung (2010c) も参照。

44) 『ギリシア人の哲学』初版が1852年に完結した後、原始キリスト教の研究と並行してツェラーは改訂作業に取り掛かり、1856年から増訂第二版の刊行を開始している (1868年に完結)。1862年の講演「認識論の意義と課題について」のより詳細な読解のためには『ギリシア人の哲学』緒論の初版および第二版の比較検討が求められるが、紙数その他の都合で今回は断念した。

45) Cf. Leuze (1911 : 539). この講義の記録についても検討を加えるべきであるが、その史料を入手できていない。前掲註44の課題とともに、他日を期したい。

——が教鞭を執った地にあつて、論理学ひいては形而上学に対する「認識論」の固有の意義と課題とを明確な哲学的展望のもとに語って見せることで、ヘルムホルツやフィッシャーによって踏み出されつつあった《カントへの復帰》の道をつエラーはさらに広く切り拓いてゆくことになるだろう<sup>46)</sup>。

開口一番いわれるように、講演の目的は「論理学が科学的 (wissenschaftlich) 境位を得るには認識論に基づかねばならず、認識論は論理学によって完成されなければならない」という信念を開陳することであり、それゆえ問題はさしあたっては「論理学」に——より踏み込んでいえば、その「形式」と「内容」の取り扱いに——関わる<sup>47)</sup>。

「論理学」という名称は二千年来、対象との関係を度外視して思考の形式と法則に関わる研究を指して用いられてきたが、これに対して近時、ヘーゲルと彼の後継者たちは「思弁的論理学」ということで「思考形式の認識だけでなく、同時に現実的なもの (das Wirkliche) [……] の認識をも授けようとする」、つまり、「論理学であるだけでなく同時に形而上学でもあろうとする」ような論理学を持ち出した。その背後にあるのは、「形式は内容と分離されえず、そして、いずれとも任意の内容にうまく適用されうるような純然たる思考形式は真理とは無関係なものである」という考え方で、それゆえ、そこでは「思想」が「事物の本質」たるべきものとみられていた<sup>48)</sup>。

しかし、このような仕方での論理学と形而上学 (の存在論的部門) の等置は、ツエラーの見たところ容認されえない。というのも、「本質はわれわれの思考によって認識されるが、われわれの思考によって存立するのではないし、われわれの思考によって産出されもしない」からである。思考の内容と形式 (の関連) については、むしろ「科学的分析 (wissenschaftliche Analyse)」によって、「われわれの諸表象をさまざまな構成部分に区別し、現象において結合・混合されているものを分離することで、所与のものをその根源的諸要素によって説明できるようになること」が「課題」とされる。そしてその際、まず、「いかなる研究も、その諸成果に関して本質的に、当の研究に際して用いられる手続きによって条件づけられている以上、

46) カントへの復帰は早くも1852年にフォルトラゲ (Carl Fortlage, 1806–1881) とフィッシャー (Kuno Fischer, 1824–1907) とによって同時多発的に口にされている (cf. 渡邊 2013 : 177–179)。しかし、いずれもヘーゲル没後の党派争いの文脈のもとでフィヒテと抱き合わせに口にされたものであり、そういう意味では自然科学的認識論の先駆としてのカントへの復帰を説いた1855年のヘルムホルツの講演「人間の視作用について (Ueber das Sehen des Menschen)」こそ、真に画期をなすものであった。そこでヘルムホルツ (Hermann von Helmholtz, 1821–94) は「カメラ・オブスクラ」に擬えられる人間の視覚メカニズムについて説明した後、次のようにいっている。「われわれの知覚様式が外的客観によってのみならずわれわれの感官の本性によっても条件づけられているということは、上述の事実によって非常に明白になり、そしてそれはわれわれの認識能力の理論 (die Theorie unseres Erkenntnisvermögens) にとって何よりも重要なのである。近時感官の生理学が経験の方途によって示したのとちょうど同じことを、カントは既に以前に人間精神の諸表象に対して示そうとした」(Helmholtz 1855 [1903 : 99])。——やがて1860年にはフィッシャーの『近代哲学史』第三卷 (巻タイトル『イマヌエル・カント 批判哲学の発展史と体系』) が出版され、こうした新たな機運が強力に後押しされつつあるところでツエラーも登壇する。

47) Zeller 1862 [1877 : 479].

48) Zeller 1862 [1877 : 479–480].

あらかじめ科学的手続きの諸制約と諸形式とを確定しておかないことには、現実的なものの探求に科学として確かな仕方で着手することは不可能である」として、形式論理学の意義と課題が限定される<sup>49)</sup>。

こうしてツェラーは、論理学が「科学の方法論」として形而上学も含めてあらゆる実質的学に先行するものであることを強調する。その根底をなすのは、「われわれがそれを介して事物の本質を認識する思考作用は、その作用によって認識されるものとはまさしく別の何かである」という認識で、これは『ギリシア人の哲学』で古代哲学との対照において把握された近代哲学の一般的性格とも関わるものとみられるが、そのうえで、いまそうして思考の対象との区別において捉えられた思考の形式の「実在的基礎」がさらに問われるならば、「旧来の論理学は今後この根底を、形而上学ではなく、認識論のもとに求めさえすればよい」という。というのも、《思考形式の対象との関係》は《その形式の対象認識に関わる「精神活動」への関係》を通じて具体的に判定されるからで、それゆえツェラーは「この活動が認識論の本来の対象を成しているからには、認識論というものがあることは明々白々で、思考形式が自身にとって血の通ったものとなり、恣意的な形式という見かけを無くすべきならば、この科学はそこへ立ち還ら (zurückgehen) ねばならない」という<sup>50)</sup>。

ところでこの「哲学的認識論」は、われわれの表象形成の諸制約を研究するものである限りにおいて、同時にまた「哲学および科学一般の正しい方法についての最終決定」がそこから始められる「全哲学の形式的基礎」という「意義」をも有する<sup>51)</sup>。——そしてこの点で誰よりカントが、表象の起源と真理性をめぐる一連の問いの定礎者・解明者として、高く評価される。発端は古くソクラテスまで遡るものの、「認識論」について「その意義 (Bedeutung) がすっかり際立たされ、その課題 (Aufgabe) が鋭く規定されるに至ったのは、ようやく前世紀 [= 18世紀] のことで」、しかも、ベーコンとデカルトをそれぞれ出発点とする経験論と合理論の諸家による取り組みは、「われわれの表象を経験かわれわれ自身の精神か、そのいずれかから一面的に (einseitig) 導く」というものだった<sup>52)</sup>。これに対してカントは、「われわれの表象の形式と素材とを区別することで、両者 [= 経験論と合理論] の立場を結びつけ、まさにそれにより両者を克服すること、つまり、私たちの表象の一部のみならずそのすべてを、客観の成果であると同時に私たちの自己意識の所産であると捉え」、これにより哲学を「ドグマティズムから抜け出させ」た<sup>53)</sup>。

しかしこの後、いわゆるドイツ観念論の諸家は「一面的で危険でなくもない進路」へと向かっていった<sup>54)</sup>。すなわち、物自体の認識不可能性というカントの主張をうけて、むしろ「哲

49) Zeller 1862 [1877: 480–481].

50) Zeller 1862 [1877: 482–483].

51) Zeller 1862 [1877: 483].

52) Zeller 1862 [1877: 485].

53) Zeller 1862 [1877: 485].

54) Zeller 1862 [1877: 485].

学の課題」は「この誤って外界とされているすべてを意識の現象として、無限の自我の作品、その発展の契機として概念把握すること」にこそあるとされた<sup>55)</sup>。フィヒテからシェリング、そしてヘーゲルへと至ってこの思想は「宇宙の弁証法的構成 (dialektische Construction des Universums)」という試みにまで行き着くが、とはいえそれは「人間の認識作用の諸制約を無視し、また知の理想をいっぺんに上から (mit Einem Griff von oben herab) 掴もうと望んでいる」ため、「その目的を達しなかったし、そもそも達しうるものではなかった」<sup>56)</sup>。——しかるに、長きにわたって威力をふるってきたその魔術をうちやぶるには、ヘーゲルの体系がやはり先立つ哲学からの自然な発展の結果である以上、「彼が先行者達と共有している基礎を新たに、また従来以上に徹底的に研究する」ことが必要である<sup>57)</sup>。

以上からも見てとれるように、古代哲学の場合と同様、並行して進めつつあった実証的な哲学史の仕事に依拠してツェラーは近代哲学の発展史的展望を示し<sup>58)</sup>、これによってドイツにおける哲学の現状と課題の把握に向かうが、その結果として示されるのは、「哲学がひとつの転回点 (Wendepunkt) に、すなわち、うまくすると新たな基礎のもとでの再編へ、へたをすると崩壊や解消へとつながる転回点にさしかかっている」という認識である。目下ドイツでは、一方で「雄大で統一的な諸体系」にかわって「散乱と停滞の劇」が演じられ、他方で自然諸科学と哲学のミスマッチ、つまり、「哲学の方は、数世紀前と比べて、より多くのことを特殊諸科学から学ぼうとしているのに対して、特殊諸科学の方では次のような先入見を、すなわち、特殊諸科学は自らの目的のために哲学を必要としないどころか、その仕事を哲学に邪魔されるのではないかという先入見をますます強固なものにしつつある」という状況が見られる<sup>59)</sup>。そこで「このまったく健康ならざる状態」の《治療》を意図して、ツェラーは次のようにいってのける。

ひとまとまりの発展のあるところではどこでも、ときどき次のような必要が生じる、すなわち、その発展の出発点に立ち戻り (zurückkehren)、根源的な課題 (Aufgabe) を想い出し、根源的な精神においてその課題を——おそらくは別の手段を用いて——解決するべく新たに試みる必要がある。そのような時機がいままさにドイツ哲学に到来したかに見える。しかるに、現今のわれわれの哲学がそこに位置している発展系列のはじまりはカントであり、カントが哲学に新たな道を切り拓くこととなったその科学的成果とは彼の認識の理論 (Theorie des Erkennens) である。われわれの哲学の基礎をより良いものにしようと思う

55) Zeller 1862 [1877 : 486].

56) Zeller 1862 [1877 : 488].

57) Zeller 1862 [1877 : 489].

58) バイエルン王立アカデミーの依頼によって、ツェラーは『ライプニッツ以来のドイツ哲学史 (Geschichte der deutschen Philosophie seit Leibniz)』を1873年に上梓することになる。執筆にあたって裨益されたというエルトマンやフィッシャーの『近代哲学史』と比べれば「薄い」書物ではあるが、それでも同書は優に900頁を超える。

59) Zeller 1862 [1877 : 489].

者は誰しも、われわれの世紀の科学の諸経験によって豊かにされ、そうすることでカントの犯した誤りを避けるために、この研究へと何をおいても立ち還る（zurückgehen）であろうし、カントが立てた問いを彼の批判の精神において新たに研究せねばならないであろう<sup>60</sup>。

## 5. むすびに—— 認識論の「現在」に向けて

こうしてツェラーは認識論の「意義」を、論理学および形而上学との区別と相関において、かつ、近代哲学の歴史的展開に即して明らかにし、その出発点をなす「カント」とその「批判主義」の名のもとに今後の課題を語って見せる。すなわち、われわれの諸表象の「源泉（Quelle）」と「真理性（Wahrheit）」とについて、一切の経験から独立な「純粹」な表象と認識不可能な即自としての「物自体」という考えは「カントの批判主義の根本的誤り（der Grundfehler des kantischen Kriticismus）」として斥け<sup>61</sup>、むしろ、客観的印象と主観的表象活動の協働によって成立している対象認識（経験）について、自然科学の方法と成果を範として「仮説」と「実験」を繰り返し、そうして経験の「アプリアリな構成部分（apriorische Bestandtheile）」を分離して「客観的所与（das objektiv Gegebene）」の把握へと歩を進めてゆくこと<sup>62</sup>。——そうした「発生的（genetisch）」研究が、経験的および思弁的ドグマティズムに対する「批判主義」の課題であるとして、著者はこの論を閉じている<sup>63</sup>。

盟友ヘルムホルツの影響色濃いツェラーのこうしたプログラムは、たしかに、事実問題と権利問題の峻別を説く後進のヴィンデルバントらの「論理主義的」立場からして「生理学的」あるいは「心理主義的」な、克服されるべき素朴な立場とされることにはなるだろう。その点だけ見れば、むしろ認識論と心理学の区別を強調していたE・ラインホルトの方がよりモダンであったといえなくもない（が、もうひとまわりすれば、ツェラーの立場は自然主義的といえなくもない）。とはいえそれは非歴史的な物言いで、ここまでテキストに即して見てきたところからも示唆されるように、「認識論」が単なる党派的旗印にとどまらずひとつの探究課題として動き始めるためには、それが哲学的展望のもとに置かれ、かつ、党派ひいては哲学の外部へと持ちきたらされる——つまりヘーゲル主義と自然科学との対決——という契機が不可欠であった。

「認識論」という名称とともに19世紀中葉に新たに興った哲学的ディシプリンのその後の展開については信頼できる先行研究に譲るが<sup>64</sup>、それが20世紀初頭にかけて心理主義から論理主義へ、主観主義から客観主義へと推移していったということは、かつてよく知られていたと

60) Zeller 1862 [1877: 490].

61) Zeller 1862 [1877: 491-2].

62) Zeller 1862 [1877: 494-5].

63) Zeller 1862 [1877: 495].

64) Cf. 佐藤(1934): 廣松(1991: 293-351).

おりである。自然科学および精神科学の展開と足並みをそろえつつ盛期新カント派の諸家は「意識一般」という主体概念に立脚してその基礎づけに携わったが、科学・形而上学・社会問題の進展とあいまってやがて論理実証主義・生の哲学・マルクス主義などの台頭がみられ、それぞれの立場から批判的に「認識論」（とその根底をなす主体概念）の捉え直しが進められることとなった。——科学哲学（知識論）、現象学・哲学的解釈学、知識社会学といった21世紀の今日に直接つながる諸ディシプリンは、そうした批判的対決の所産であり、そしてその限りで、ツェラーのプログラムを継承するものである。

こうした事実は「知識論」等について論じる際にもあまり言及されることはなくなっているが、もしかすると、口にしないだけで誰にとっても自明のことなのかもしれない。そうであるならば、認識論・知識論の現状と今後については何も心配することはないだろう。しかしそうでないとするれば、そして潔く哲学（認識論・知識論）を諦めて実証科学（知識社会学）に徹するというのでないとするれば、認識論がその150年の歴史の中で何を得て——記号論理学と「知識の生産（production of knowledge）」という観点だろうか——、また何を失ったか——歴史や主体性はどこへいったのか——、ツェラーがしてみせたように哲学の歴史と諸科学の現状に照らして再び（あるいは三度）そのことを問い直すことを、すべてが忘れ去られる前に新たにはじめなければならないだろう。

## 文献表

### 1. ツェラーの著作

- (1843). "Die Geschichte der alten Philosophie in den letztverflossenen 50 Jahren mit besonderer Rücksicht auf die neuesten Bearbeitungen derselben," in Otto Leuze (Hrsg.) (1910). *Eduard Zellers Kleine Schriften*. Bd. 1, Berlin: Georg Reimer, pp. 1 – 85.
- (1844). *Die Philosophie der Griechen. Eine Untersuchung über Charakter, Gang und Hauptmomente ihrer Entwicklung. Erster Theil: Allgemeine Einleitung. Vorsokratische Philosophie*. Tübingen: Ludwig Friedrich Fues.
- (1846). *Die Philosophie der Griechen. Eine Untersuchung über Charakter, Gang und Hauptmomente ihrer Entwicklung. Zweiter Theil: Sokrates, Plato, Aristoteles*. Tübingen: Ludwig Friedrich Fues.
- (1852a). *Die Philosophie der Griechen. Eine Untersuchung über Charakter, Gang und Hauptmomente ihrer Entwicklung. Dritter Theil: Die nacharistotelische Philosophie. Erste Hälfte*. Tübingen: Ludwig Friedrich Fues.
- (1852b). *Die Philosophie der Griechen. Eine Untersuchung über Charakter, Gang und Hauptmomente ihrer Entwicklung. Dritter Theil: Die nacharistotelische Philosophie. Zweite Hälfte*. Tübingen: Ludwig Friedrich Fues.
- (1856). *Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung. Erster Theil: Allgemeine Einleitung. Vorsokratische Philosophie*. Zweite, völlig umgearbeitete Auflage. Tübingen: Ludwig Friedrich Fues.
- (1862). *Ueber Bedeutung und Aufgabe der Erkenntniss-Theorie*. Heidelberg: Karl Groos. in (1877). *Vorträge und Abhandlungen*. Zweites Sammlng, Leipzig: Fues Verlag (R. Reiland), pp. 479 – 496.
- (1873). *Geschichte der deutschen Philosophie seit Leibniz*. München: R. Oldenbourg.

### 2. テンネマンとE・ラインホルトの著作

- Reinhold, Ernst (1827). *Die Logik oder die allgemeine Denkformenlehre*. Jena: Cröker
- Tennemann, Wilhelm Gottlieb (<sup>2</sup>1816). *Grundriss der Geschichte der Philosophie. Für den akademischen*

*Unterricht*. Zweyte verbesserte Auflage. Leipzig: Johann Ambrosius Barth.

——— (1819). *Geschichte der Philosophie*. Bd. 11, Leipzig: Johann Ambrosium Barth.

### 3. 研究文献

Beiser, Frederick C. (2015). *The genesis of Neo-Kantianism 1796 – 1880*. Oxford: Oxford University Press.

Diels, Hermann (1911). “Gedächtnisrede auf Eduard Zeller,” in Leuze (1911), pp. 465 – 511.

Eisler, Rudolf (<sup>4</sup>1927). Art. “Erkenntnistheorie,” in *Wörterbuch der philosophischen Begriffe*. 1 Bd., Berlin: E. S. Mittler & Sohn, pp. 389 – 395.

Hartung, Gerald (Hrsg.) (2010a). *Eduard Zeller. Philosophie- und Wissenschaftsgeschichte im 19. Jahrhundert*. Berlin/New York: De Gruyter.

——— (2010b). “Eine Schatzkammer des Wissens. Leben und Werk des Gelehrten Eduard Zeller,” in Hartung (2010a), pp. 1 – 23.

——— (2010c). “Zum Verhältnis von Philosophie und Wissenschaften bei Eduard Zeller,” in Hartung (2010a), pp. 153 – 176.

Helmholtz, Hermann von (1855). “Ueber das Sehen des Menschen,” in (<sup>5</sup>1903). *Vorträge und Reden*. Bd. 2, Braunschweig: Friedrich Vieweg und Sohn, pp. 85 – 118.

廣松 渉 (1977) 『科学の危機と認識論』 紀伊國屋書店

——— (1991) 『世界の共同主観的存在構造』 講談社

Köhnke, Klaus Christian (1981). “Über den Ursprung des Wortes Erkenntnistheorie - und dessen vermeintliche Synonyme,” *Archiv für Begriffsgeschichte*, 25, 185 – 210.

——— (1993). *Entstehung und Aufstieg des Neukantianismus: Die deutsche Universitätsphilosophie zwischen Idealismus und Positivismus*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.

Leuze, Otto (Hrsg.) (1911). *Eduard Zellers Kleine Schriften*. Bd. 3, Berlin: Georg Reiner.

宮本富士雄 (1948) 『哲学史の哲学』 弘文堂

Rorty, Richard (1979). *Philosophy and the mirror of nature*. Princeton: Princeton University Press. [リチャード・ローティ、野家啓一監訳 (1993) 『哲学と自然の鏡』 産業図書]

佐藤慶二 (1934) 『認識論概説』 理想社

Schaede, Stephan (2010). “Eduard Zeller als Theologe. Einige Beobachtungen – auch zu seinem Verhältnis zu David-Friedrich Strauß,” in Hartung (2010), pp. 209 – 241.

高橋里美 (1932) 『岩波講座 哲学 認識論 (上) (下)』 岩波書店 [増補版: 高橋里美 (1938) 『認識論』 岩波書店、のち (1973) 『高橋里美全集第二巻 認識の問題』 福村出版、5 – 232頁に収録]

戸田山和久 (2002) 『哲学教科書シリーズ 知識の哲学』 産業図書

Vaihinger, Hans (1876), “Über den Ursprung des Wortes ‘Erkenntnistheorie’,” in *Philosophische Monatshefte*, 12(2), 84 – 90. [ハンス・ファイヒンガー、渡邊浩一訳・解題 (2013) 「『認識論』という語の起源について」、『人間存在論』、19、55 – 68]

渡邊浩一 (2013) 「なにゆえ「カントに還らねばならない」のか——リープマンの『カントとエピゴーネン』について」、『日本カント研究』、14、168 – 182。

Wundt, Max (1932). *Die Philosophie an der Universität Jena in ihrem geschichtlichen Verlaufe dargestellt*. Jena: Gustav Fischer.